

小学部低学年グループ研究

1. 研究グループの概要

- 小学部低学年 音楽2グループ在籍児童6名(1年生3名、2年生3名)
- 研究グループの構成は、低学年担任10名

2. 研究経過


(1) 実態把握

- ①音楽活動のチェックリスト(※1)に基づき、実態把握に取り組んだ。
- ②1学期の反省(目標、単元・題材設定、取り組み方法、評価規準、体制)をKJ法で行った。反省をまとめ、2学期以降の授業の方向性や目標、評価規準の設定に結び付けた。

(2) 授業実践

研究対象グループの単元の目標、題材設定・それぞれの児童のねらいたいことを全員で確認した。それを踏まえて、器楽(『アイアイ』『あわてんぼうのサンタクロース』)について授業実践を行った。ビデオ撮りしたものを見ながら、「R5授業実践シート～指導と評価の一体化を目指して～」(補足資料①)に沿って、小学部低学年の教員全員で授業の充実を図るための視点で、反省・改善を行ってきた。

3. 成果と課題

活動	課題	改善・手立て	結果
題材内容 『アイアイ』や『あわてんぼうのサンタクロース』に合わせて楽器を鳴らす活動(楽器：鈴、タンブリン、カスタネット)	<ul style="list-style-type: none"> • 「合わせる」の概念の認識が、教師間で異なっていた。 • 児童によって、曲のテンポが合っていなかった(早かった)。 	<ul style="list-style-type: none"> • グループ研究において話し合い、共通の認識をもった。 • 様々な速さの伴奏を用意し、児童の実態に応じて使い分けた。 	<ul style="list-style-type: none"> • 全ての教師が同じ視点で児童を指導したり、評価したりすることができた。 • 児童の実態やねらいに合わせて、取り組むことができた。
教材教具 	<ul style="list-style-type: none"> • 楽器に関して、興味・関心の差があり、視線を向けられない児童も多く、教師の促しが必要であった。 	<ul style="list-style-type: none"> • 児童の視線や好きな動きなどを観察し、楽器を上から吊るす提示の仕方に変更した。 	<ul style="list-style-type: none"> • 児童の視野に入りやすくなった。興味や意欲も高まり、教師の促しがなくても自ら楽器に触れる児童が増えた。「やりたい」気持ちや期待感をもって取り組める児童が増えた。
指導方法 一人ずつ取り出して行う。	<ul style="list-style-type: none"> • 待ち時間が長くなり、待っていることが難しい様子の児童がいた。 	<ul style="list-style-type: none"> • 繰り返し取り組むことで、見通しがもてるようになり、順番を待てるようになった。 	<ul style="list-style-type: none"> • 繰り返し取り組んだことで、実態に合わせて2人で一緒に取り組めるようになった児童がいた。

- 教材教具を工夫したことで、楽器がでてくると注目したり、自ら触れにいたりするなど児童の興味・関心を引き出すことができた。特に、児童の実態に合わせて教材の提示位置(楽器を上から吊るす、机上に提示)を工夫し、視野に入りやすいようにすることが有効であった。
- 話し合いを重ねる中で、評価規準や評価基準の考え方について、共通理解を図ることができていない面に気付くことができた。授業の様子を映像で見ながら振り返りを行ったことで、学習評価について教師間の捉えを統一することができた。また、有効な手立てや教材教具について意見交換しながら共通理解を図り、授業改善に繋げることができた。

※1 加藤博之(2007)「子どもの世界をよみとく音楽療法 特別支援教育の発達の視点を踏まえて」内のチェックリストを研究部で特別支援学校学習指導要領小学部の音楽の内容1～3段階に対応させたもの